

# 土俵入り

## 残したレーガン

# 赤いケネディが宣言した現実主義

●東大教授・国際関係論

中嶋 嶺雄

全世界が固唾をのんで見守っていた米ソ首脳会談は、大方の予想をはるかに上回る展開のうちに歴史的な共同声明の発表で終幕した。

第二次大戦後の米ソ対立という宿命的な国際政治の流れのなかで、米ソ首脳会談は過去四〇年間に今回を含めて九回に及ぶが、これほど注目を集め、これ

ほど華麗な外交ショーがくりひろげられたことはなかった。

しかも、今回の首脳会談は、その外形的な舞台装置にも増して重大な果実をもたらした。それは、東西冷戦から米ソ平和共存という歴史の転換を画したキヤンプ・デービッド会談（一九五九年九月のアイゼンハワー―フルシチョフ会談）の歴史的意義を上回るという過言ではあるまい。

このことは、「双方は……核

戦争には勝利がなく、決して戦ってはならないとの点で意見が一致した。……核戦争であれ通常の戦争であれ、両国間のいかなる戦争も防止することが重要であることを強調した。双方は、

軍事的優位を追求しようとはしないであろう」との平易にして格調高い共同声明が十二分に物語っている。

もとより、今回の米ソ首脳会談によって、今日の米ソ新冷戦が終結したと見るのはあまりに

も楽観的であろう。会談それ自体についても、外交ショーが終わってからは、きわめて深刻な対立や応酬があったことが次第に露になってきている。

しかし、すでに来年六月のゴルバチョフ訪米、再来年六月のレーガン訪ソが発表されたことにも示されるように、米ソ関係は基本的に関係改善の方向へ大きく流れはじめており、一九八〇年代後半が米ソ緊張緩和の時代になるのではないかとこの展望が、現実性を帯びてきたことは否めない。

このような大きな転換は、なぜ生じたのだろうか。それは、今日の肥大化した核軍拡競争とその悪循環が米ソ両国の経済的・社会的存立それ自身にとってあまりにもコストの重いものになってきているという深刻な危機感に米ソ両首脳が共同認識と

してとらわれていたからにほかならない、と私は考えている。

首脳会談に向けての米ソ宣伝合戦や、あたかも五〇年代初めのアルジャー・ヒス事件を想わせるような「米ソスパイ論争」が起きたことから、今回の会談がこんなにも進展するとは一般に見られていなかった。そして、このような進展を促したのは、レーガン大統領とともにゴルバチョフ書記長自身であったことは、すでに詳しく報じられている。

もとより、ソ連側としては、今回の米ソ首脳会談こそ行き詰まっていた軍縮交渉に大きな風穴を開ける最後のチャンスだとの認識を強めていたのだが、それはいうまでもなく、アメリカの新しい戦略防衛構想（SDI）問題に直面したからであった。では、ソ連はなぜSDI反

一一月一九日から三日間、米ソ首脳がジュネーブで信頼醸成を話し合った。ゴルバチョフ・ソ連書記長は共同声明作りに激しい意欲を燃やし、それほどの積極さを予期していなかった米側を驚かせた。受けて立ったレーガン米大統領は、戦略防衛構想（SDI）をちらつかせつつも、一対一の密談で、若い書記長の心を解きほぐそうとした。七年ぶりに土俵に上がった気鋭と老練の両力士は、信頼樹立へのがっぷり四つを誓い合い、一九八六年と八七年、相互訪問をすることで合意した。

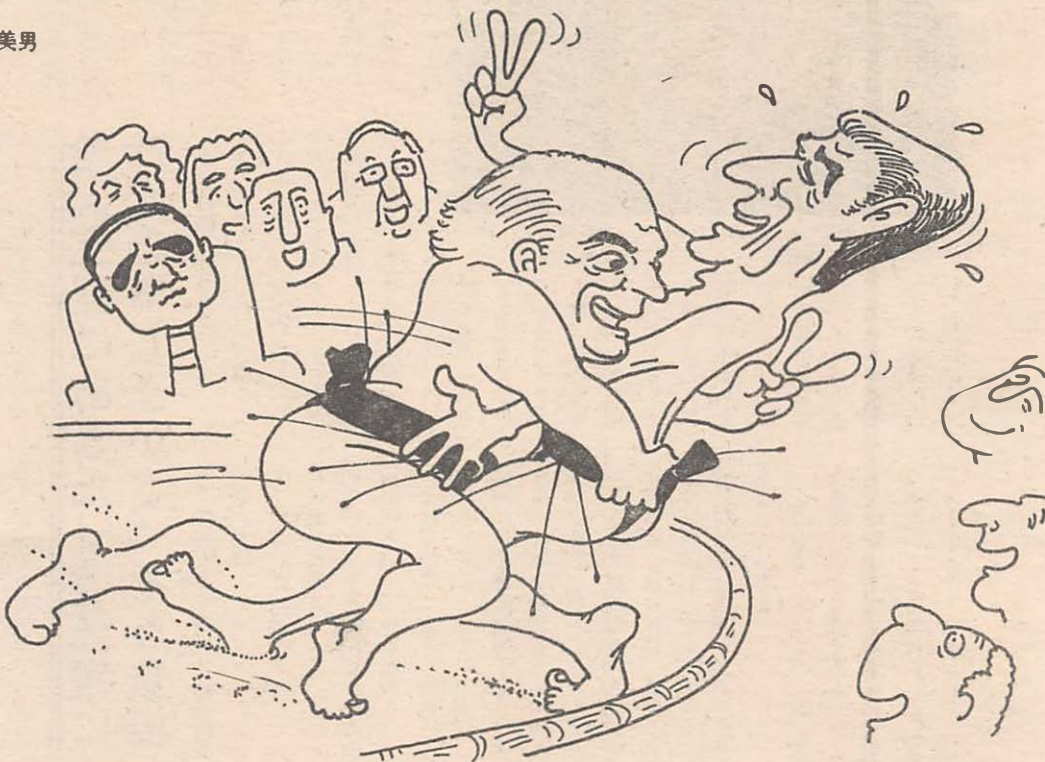


# 米ソ首脳7年ぶりの

## ゴルバチョフ怒涛の寄り 反り身で

イラスト・遊佐喜美男

対にそれほど固執するのか。ソ連側の致命的弱点である先端科学技術の著しい立ち遅れという現実がそこにあるからである。ソ連はいまや通常の核軍拡競



争においては対米バリティー（対等）を達成し、核弾頭数ではアメリカをも上回ると一般に推定されている。一九六二年のキューバ危機でアメリカに対し

屈辱的な「敗北」を喫して以来四半世紀近く、ソ連は国内経済を犠牲にしても核軍勢力の充実に力を注いできたのだが、その軍拡もいまや極限に達して苦境に陥っていた。

このようなときに、アメリカがSDIを提起しただけに、ソ連としては、絶対にこれを阻止しなければならぬ立場に立っている。私自身、まだSDIについてほとんど一般には知られていない時期に、ソ連側とのある会議で、ソ連の代表がアメリカの「宇宙戦争」を激しく非難し、初めてSDIの存在を知ったという体験がある。

このようなソ連側の脆弱性を認識しているがゆえに、ゴルバチョフ書記長は登場以来「科学技術革命」の緊急性と必要性をたえず唱えており、来年二月のソ連共産党第二七回大会に向けて採択されたソ連共産党新綱領も「科学技術革命による国民経済の発展」を目玉にしているのである。

たしかに、ソ連は今日、世界的な核軍事大国でありながら、コンピューターひとつ、国際会議用ペーパーのコピーひとつ、

日常的には満たされない社会であることを、私はしばしば体験している。

こうしたソ連としては、今回の首脳会談を人類が従来の核抑止戦略体制にとどまるか、SDIという途方もない防衛構想の時代に突入するかの重大な岐路だと受け止め、そのかぎりにおいてSDIと核軍縮との「リンケージ・ポリティックス（連繫政治）」を、まさに国際政治学のテキスト通りに展開しようとしたのであった。

このソ連側の狙いが今回の首脳会談で十分に達成されたとはいえない。にもかかわらず、このように問題点を明白にし、この点での困難な対米交渉を将来にゆだねたという点で、ソ連側の収穫は大きかった。

なぜなら、今回の首脳会談が仮に決裂した場合を想定してみよう。それは、当面の核軍縮への道が閉ざされるばかりか、ソ連としてもSDI型の巨額の負担を要する新防衛戦略体制へ移行せざるを得ないという自己破壊の道を歩まねばならなくなり、このことはソ連の社会的・経済的な再生を目指すとする



ゴルバチョフ体制そのものにとっても命取りになりかねないであろう。

このような認識に立てば、ソ連は今回の会談を決裂させるわけにはゆかなかった。そして、

ここにおいて従来の指導者と決定的に異なる点は、米ソ関係改善へのアプローチにおいて、ゴルバチョフ書記長が終始一貫「現実主義」の立場に立っていたことであり、このような姿勢こそが米ソ会談を成功へと導いた最大の要因であった。ゴルバチョフ書記長は、共同式典における発言で「われわれは現実主義者でなければならない」と語

り、また記者会見でも「もっとも重要なことは現実的であることだ」と語っていた。

「現実主義」「現実的」という言葉は、最近のソ連で、どちらかというとハト派的な学者がよく口

## 老人支配にあきたソ連民衆に時代の申し子がさっそうと登場

米ソ首脳会談を前にして、このところアメリカには、数多くのゴルバチョフ論が存在しているが、もっともよくゴルバチョフ書記長を表現しているのは、Commissar Kennedy (赤ウケネディ) という形容であろう。

欧米流のエレガンスを身につけているライサ夫人は、この点でナンシー大統領夫人よりもジャクリーヌ夫人に擬せられるかもしれない。

それほどまでに、ゴルバチョフ登場は颯爽たるものであったし、長いブレジ

にする言葉ではあるが、これまでのクレムリンの最高指導者でこのようにはっきりと「現実主義」を標榜したリーダーがあらうたであらうか。ここにもソ連の新しい変化があらわれている。

ネフ体制とその後のソ連指導者の老人支配(ジェロントクラシー)に苛立ち、あきあきしていたソ連の民衆にとって、まさにゴルバチョフ書記長は時代の申し子だといつていいだろう。

それだけに、大きく変容しつつあるソ連にとって対米関係の改善は不可避の前提であり、ゲロムイコ外交の重苦しい情性からの転換を必要としていた。このようなソ連社会の内在的要請を見ることなしには、今回の米ソ会談に臨んだゴルバチョフ書記長の立場を理解することはできないであらう。

この点で、かつての「封じ込め政策」の立案者であり、アメリカにおける対ソ認識をもっとも奥深いところで代表しているジョージ・F・ケナンが、「ゴ

ルバチョフが目指す中心目標は、スターリン時代以来、ソ連のシステムの足かせとなり、またソ連の威信を傷つけてきた後進性と情性を克服することにある。そのためには国内問題に専念し、ソ連の限られた資源配分を大幅に変更することが課題であり、具体的には高価につく外国への政治的・軍事的介入をやめ、その資源を国内投資に振り向けることである」(「首脳会談の主要な仕事は軍備管理である」『インタナショナル・ヘラルド・トリビューン』一九八五年一月四日)と述べていたのは、さすがだといえよう。

ソ連認識にかんして言えば、アメリカには一般の根強い反ソ感情にもかかわらず、右のジョージ・ケナンをはじめ、ハーバード大学のアダム・ウーラム教授、コロンビア大学のスウェリン・ピアラー教授ら、ソ連の意図をソ連社会の内面に照らして考えようとする有力な見解が多い。

わが国においては、外交当局者もソ連専門家も、その多くがあまりにもパターン化された「ソ連悪玉論」に凝り固まって

いすぎはしないか。そのような固定観念からすれば、ゴルバチョフの登場にもかかわらず、ソ連社会のシステムは変容せず、いかにゴルバチョフ個人が変化を求めても、ソ連は変わるものではないと言った結論にならざるを得ない。

しかし、私自身は、いまやソ連はフルシチョフ時代以上の歴史の変容期にさしかかっていると見做しており、現にゴルバチョフ体制下のわずか八カ月においても、目を見張るばかりの変化を相次いで遂げている。このことは、ゴルバチョフの権力基盤がかなり強いものであることをも示唆しているよう。

ゴルバチョフ政治の第一着手は、人事の思い切った刷新であり、若返りであるが、それはライバルのロマノフ政治局員の追放、チーホフ首相の更迭、ゲロムイコ外相の棚上げにはじまって、この一〇月中旬以降のバヤコフ国家計画委(ゴスプラ)議長解任、バトリチェフ外国貿易相の解任と相次いでいる。新任のルイシコフ首相、シエワルナゼ外相、タレイジン国家計画委員長、アリストフ外国



夕食後、最後の討論に入ったレーガン大統領(左)とゴルバチョフ書記長=ロイター・UPIサン



貿易相は、いずれもアンドロポフ体制下でゴルバチョフを支えた改革派であり、しかも七〇代から五〇代へ六〇代前半へとソ連のリーダーシップは約二〇歳

も若返っている。人事の刷新はクレムリンのトップばかりか、地方の党書記にも及んでおり、すでに約六〇%の書記が入れ替わっている。

## 会談は画期的な成功だったが 対ソ不信感解消していない

ゴルバチョフ政治のもう一つの特徴は、まさにケネディ大統領がベスト・アンド・ブライテストなブレインを集めたのと同様のブレイン・トラストの形成であり、これも従来のソ連政治に見られない特徴だといえよう。今回の米ソ首脳会談にも同行した党中央宣伝部長のヤコブレフは、ソ連科学アカデミー世界経済国際関係研究所の前所長としてアカデミーの代表的存在

であったし、同じくアメリカ・カナダ研究所のアルバート所長は米ソ関係の知恵袋としてジュネーブでも脚光を浴びていた。積年のソ連経済のネックであった中央集権システムを分散化し、より柔軟な経済システムを形成すべきだと大胆な提言をおこなったノボシビルスク経済・工業生産組織研究所のアガンベギャン所長もゴルバチョフ書記長に重用されており、彼にた



「人類の希望と平和」をうたった「女の共同声明」をカプセルに入れるナンシー米大統領夫人（左から二人目）とライサ・ソ連書記長夫人（右）。カプセルは新築の赤十字美術館の親石に入れられる。W W P

いするソ連の学界の期待も大きい。

もとより、ケネディ大統領がベスト・アンド・ブライテストな頭脳集団を擁しながらベトナム戦争の泥沼に陥って行ったように、ゴルバチョフ政治も願か

ないという保証はないけれど、それだけに彼は当面の第一二次五カ年計画（一九八六～九〇年）を中心に経済の大幅な再編を行い、とくに科学技術革命に力を入れようとしているのである。

そうしたゴルバチョフ書記長の意欲は、来るべきソ連共産党第二七回大会の開催日を、あの歴史的な「スターリン批判」が敢行された二月二五日に決めていることにも窺えようが、フルシチョフがスターリン体制の解体という過去の破壊を衝撃的に行ったのに比して、ゴルバチョフ書記長は、未来に向かって、従来のシステムを大胆に変革してゆかねばならないという課題を負っている。

米ソ首脳会談の画期的な成功に及んで、地域紛争がかえって

## 増補版精神医学事典

臨床に、社会病理の解明に——最新の動向を漏れなく収める

発売中

加藤正明・保崎秀夫・笠原嘉・宮本忠雄・小此木啓吾ほか編 初版刊行以後10年の進展いちじるしい家族精神医学・精神療法治論・神経生理学・精神薬理学・神経化学などの分野に重点をおいて三五〇余の項目を増補した最新版。精神科専門医のみならず幅広い層の支持を受けて来た本事典は、今回の増補版刊行によってさらに多方面からの要望に応える。A5判1200頁【内容案内星】15000円

## 刑事訴訟における 証拠排除

11月30日刊

井上正仁著 職務質問、盗聴など違法収集証拠をめぐる問題に独自の証拠排除論を展開を切り拓いた力作。比較法的・理論的な観点からわが国における従来の証拠排除論を精細に検討・再構成した助手論文に、最新の動向を書下して補った注目の書である。A5判616頁 6800円

弘文堂  
101東京・神田駿河台1-7



激化したという悪しき教訓を回避できる明白な保証もない。

もっとも、この点では国際政治のもう一つの焦点である中国が、最近の中ソ関係の著しい改善によって、ソ連の立場にかなりの同調を示しつつあるのを、

無視するわけにはゆかない。たとえば中国はS D I にかんして、このところアメリカの重関係者がしばしば訪中してS D I 構想を念入りに説明したにもかかわらず、S D I 反対の立場を明言しており、また、日本の防

衛費のG N P 一割枠問題でも従来と違って強い批判姿勢を示している。

ただ、ソ連が従来と違って「現実主義」の立場に転じたことは、それだけにソ連の側の柔軟性が増大し、また中ソ関係の

改善はソ連の行動余力を大幅に拡大しつつあるともいえるだけに、今後の米ソ関係の推移いかんでは、アメリカや西側諸国に對ソ警戒心が従来以上に高まることもあり得よう。

兵器の大幅削減が将来実現したとしても、なお米ソ双方は相手を完全な破壊に追いやるに十分な核の破壊力を保持しているものであり、この点では大同小異であることを忘れるわけにはゆかない。

# 第二次冷戦からの決別を求めて

六年半ぶりの米ソ首脳会談は、中距離核戦力（I N F）に関する暫定協定や核兵器の五〇

％削減に向けて両国が交渉を促進することなどを誓約する、共同声明を採択して終了した。この結果「第二次冷戦」の開始と

ともに見做された八〇年代も、半ばを迎えてようやく緊張緩和への本格的なイニシアティブが採られるに至ったと言つてよい。

今回の首脳会談は、会談期間中内閣をいっさい公にさせない厳格な新口令を布き、レーガン、ゴルバチョフ両首脳が通訳を交

えただけで通算三時間半にも及ぶトップ会談を行ったことなど、これまでの首脳会談とは極めて趣を異にする印象を与えた。従つて、ここではこのような形で行われた首脳会談が、八〇年代の「第二次冷戦」の文脈の中で果たしていかなる意味を持つものなのかを検討することにしたい。

えただけで通算三時間半にも及ぶトップ会談を行ったことなど、これまでの首脳会談とは極めて趣を異にする印象を与えた。従つて、ここではこのような形で行われた首脳会談が、八〇年代の「第二次冷戦」の文脈の中で果たしていかなる意味を持つものなのかを検討することにしたい。

もともと、今回の首脳会談のような首脳同士の話し合いは、前例がないわけではない。例えば、一九七二年五月に第一次戦略兵器制限協定（S A L T I）が調印されたときにも、ニクソ

ン元大統領はブレジネフ元書記長と通訳を交えただけで、それもソ連側の通訳だけを臨席させて会談を行っていた。

こうした会談の形式はもともとブレジネフが執着したものであったが、ニクソンがそれに応じたのは、彼自身アメリカ側の通訳を介して会談の内容が外部に漏れるのを警戒したからにほかならない。

このように外部からの干渉を排除して首脳同士が直接意見を闘わすやり方が重視されるのは、それだけ両者の対話から両国間の関係を変革する突破口を

探し出そうとする期待感が高いことを示している。またそれとともに、強力なリーダーシップを発揮する決断がなされている場合であると言ふことができよう。

周知のように、S A L T I が締結されたことによって、七〇年代のデタントを切り開く重要な礎石が築き上げられた。しかし、今回の首脳会談は七二年五月の首脳会談と比較した場合、確かに会談のやり方では共通するところがあるものの、首脳同士の対話をはるかに多い点や米ソ両国間の外交交渉の段階とい

う点からいえば、かなり違った性格がみられると言わざるをえない。つまり、七二年五月の場合には協定の最後の詰めが行われ、それ故デタントの構築に直結していたのに対して、今回はなお出発点という性格が強い。

実際この出発点に当たって、米ソ両国の首脳がそれぞれの意見と技量との総力をあけて、い

わば全人格を賭して交渉に臨まなければならなかった点にこそ、現代の国際情勢の危機の本質が象徴的に表れていたと言つてよい。

レーガン大統領がゴルバチョ

フ

●東大教授・米政治史 五十嵐 武士